

---

# くされ縁

松宮星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くされ縁

### 【コード】

N0522BA

### 【作者名】

松宮星

### 【あらすじ】

新春企画。囲碁将棋戦。お正月つぱくw アスマ相手にシカマルが愚痴をこぼしてます。中忍選抜試験前後くらいの話。

(前書き)

明けましておめでとうございます！ 新春企画。囲碁将棋戦。お正月っぽくw

「オレも、大人ってキタネーってわめくほどガキじゃねーし、そんなめんどくせーことしたくなかったから黙ってたけどさ……あん時は、さすがに腹が立ったね。あんな堂々と嘘つかれりゃね」

「ふん、ふん」

「……イルカセンサーは、スリーマンセル三人一組の班分けはクラスの成績順に決めたって言ったんだぜ」

「ふん、ふん」

「優秀な人間が一箇所に集まらねえように、各班の力を均等にした結果……オレと、いのと、チョウジが同じ十班になったんだってさ。なの、嘘だって赤ん坊だってわかるっての」

「ふん、ふん」

「いのしかちよつ猪鹿蝶トリオの二世が、たまたま同じ年に忍者学校を卒業して、しかも、たまたま同じ班に割り振られたってか。すっげえ偶然って、オレらが感動するとも思ったのかね、あのセンサー。子供をなめすぎ。つーか夢、見すぎ」

「あははは」

「笑いごとじゃねーよ、アスマ」

奈良シカマルは溜息をついた。

「いのやチョウジと一緒にだなんて、そんな、めんどくせーのだけはご免だったのに……」

十班担当上忍の猿飛アスマは煙草をくゆらせた。

「まあ、そうクサるなって……二代目猪鹿蝶トリオ誕生は三代目のご要望だったんだよ」

「やっぱ、そーかよ」

「操作してもバレない範囲内だったんだぜ、お前らの成績。いのはくの一じゃダントツの一位、で、お前はドベのナルトとどっこい。

ま、オレらがイジらなくても、いのとお前は同じ班になってたろう」

「ぐ」

「『鉛筆を動かすのもめんどくせーっ』て忍術学校で居眠りばかりしてた誰かさんが悪いんだろ？ 真面目にやってりゃ、お前、筆記じゃ一位だったはずだ。そしたら、ピカークのーのいのとは、同じチームにやされなかつた。十班に優秀なメンバーが集まりすぎちまうからな」

「ちえっ」

「優秀ないのと、まーまーのチョウジ、ケツから二番目のお前で、うまい具合にバランスが取れてるんだよ、うちの班。学校の成績表から照らし合わせりゃ、な」

ムスツと顔をしかめたシカマルが、パチンとこきみのよい音をたて盤面に石を置いた。

「あちゃあ……」

アスマはくわえ煙草を小刻みに許し、顎の下に手をあて首をひねった。が、何度、見直しても良い手が見つからない。盤面はどう転んでも、シカマルが優勢。ひっくり返りそうにもなかつた。

「……参った」

「へへ、悪いね、アスマ」

シカマルの右の掌に、アスマは三十両(三百円)をしびしび載せてやった。

「毎度あり〜」

「お前、囲碁までうまいなんて、詐欺じゃないか」

碁石を片付けながら、アスマが部下を睨む。

同じく片づけをしつつ、シカマルはニヤニヤ笑う。

「へボだよ。けど、同じへボ相手ならどうにかなる。勝負ごとってのは勘がつかめりゃ、踏ん張りどころはなんとなくわかる」

「やだね、天才は」

「石を置かせてやるからさ、賭け金五十両にしねエ？」

「いや、もう、今日は碁はやらん」

「んじゃ、いつものヤツにする？ 将棋。飛車落ちでやってやるか」

ら、五十両で」

「……つくづくかわいげのないガキだね、お前は」

「昼飯代がねえんだもん。今日一日、アスマを力モにしてしのぐ事にした」

「……あからさまに心の内を明かすな。なんだよ、又、親父さんにカモられたのか？」

シカマルはフンと息を吐いた。

「あのクソオヤジ、煮ても焼いても食えねえ」

「しょうがねエな、ったく。賭け将棋で、任務の報酬、全部スるなよ」

「説教はオヤジにしてくれ。あつちから勝負しかけてきやがるんだやれやれとアスマは肩をすめた。

「賭け金は五十両な。飛車落ちで一回勝負だ」

「サンキュウ、アスマ。将棋の負けは将棋で取り返さなきゃな」

なら親父さんとやってくれと睨むと、今夜、又やると答えが返る。明日もシカマルにカモにされかねない。

「けど、俺に負けたらどーすんだよ、貧乏人？」

「どうも。負けねエし」

「ムカつく。泣かしてやるぜ、ガキ」

「ま、万に一つ、ボロ負けしたって平気だ。オレの担当上忍は優しいからな。かわいそうな子供に、昼飯ぐらい奢ってくれるさ」

「よーするに、お前は、猪鹿蝶トリオ二世と呼ばれるのが嫌なんだな？」

将棋を指しながら、アスマはさっきの話を蒸し返した。

「親父さん達のコピエって評価されるのが嫌なんだろ？」

「っーかさ……」

シカマルはボリボリと頭を掻いた。

「あの二人とつるむの、もう飽きたっっーか……任務ぐらい、他の

「奴等と組みでエ」

「幼馴染だもんな」

「オヤジどうし仲がいいからな……オヤジのおまけで互いの家、行き来してりゃ、顔馴染みになるぜ」

「今だってガキじゃんと、アスマは口の中で呟いた。

「なんか読めすぎっつーか、通じすぎっつーか、あの二人のパターンがわかりすぎて、つまんねえ」

「ま、そのおかげで、絶妙なコンビネーションだよな、十班は。打ち合わせ無しでも、お前ら、トラブルにもうまく対応する」

「チョージは、まあ、いいんだけどさ……いのが、めんどくせー。

昔っからうるせー奴だったけど、最近、リーダーぶりやがってギャーギャーうるせエ」

ムスツと顔をしかめ、シカマルがそっぽを向く。

「精神的近視のくせに」

「精神的近視？」

「目先のことしか見えねエってこと。ろくな作戦立てられねー奴<sup>バカ</sup>が威張るなつての。口開けば、いつもろくな事、言わねエし……それに」

「それに？」

「アイツと、いるといつも……」

「……」

シカマルは横目で、じろつとアスマを睨んだ。

「……なんでもねエよ」

「ははーん」

アスマはニマニマと笑った。

「お前、もしかして、拗<sup>す</sup>ねてんのか？」

「？」

「いのが冷たいから」

「はあ？」

「いのの奴、いっつも七班のうちはサスケの話をしてるもんなあ。」

「キヤー、サスケ君！ 素敵い！」とかな

うん、うん、と、一人で納得するかのよう<sup>ヤロー</sup>に頷き、アスマが言葉を続けた。

「幼馴染のかわいいあの子が、他の男に夢中じゃ、そりゃ、面白くねエよなあ。しかも、ライバルは顔良し、頭良し、忍術センスも抜群ときちや、お前の勝ち目は薄いもんなあ」

元氣出せよと豪快に笑う上忍を……シカマルは冷たい眼差しで見つめた。

「……アスマ」

「ん？ オレの読み、当たりだろ？」

「……オツサンくさあ」

「へ？ オツサンくさい？」

「若い男と女と見りゃ、くつつけたがるの、仲人根性<sup>なこうど</sup>って言うんだぜ。中年オヤジみてエ」

その皮肉は、二十七歳という微妙な年齢のオジさんの胸を結構、鋭く貫いた。傷ついた胸<sup>ブローケン・ハート</sup>を押さえるアスマにお構いなく、シカマルはしゃべり続けた。

「幼馴染の女なんか、オレにとつちや、モロ現実だ。あのガサツ女に夢見られるかっての。好いた惚れたとは、一番、無縁な女だよ、いのは」

「そうか？」

「アイツにとつても、オレは男じゃねエよ。オレ達は馬鹿オヤジ達のせいで、くされ縁で結びついてるだけだ。昔も今も……な」

だから、その絆を断ち切りたいのにと溜息をつき、シカマルはパチリと駒を進めた。

「げっ……」

アスマはむううと顔をしかめ、必死に将棋盤を見渡した。が、結局、数分後に諦め、投了した。

大駒落ちのシカマルに負けるのはしゃくだったが、しょうがない。小遣いをやるつもりで、シカマルに五十両を手渡した。



「あ、おバカトリオ」

うずまきナルトは会う度に、十班の三人をそう呼ぶ。

「あ、いのぶたと手下二人！」

と、頭に血を昇らせた春野サクラが叫んだ事もある。

「……うるせエのと、その仲間か」

と、うちはサスケが決めつけた事もあった。

奈良シカマルは溜息をついた。

十班は『山中いのとその他二人』と認識されがちだ。

確かに、明るくておしゃべりな、いのは目立つ。

で、いつも何かボリボリと食べているチョウジはあまりしゃべらないし、めんどくさがりのシカマルはいつもダラ〜としている。

いの一人が注目を浴びるのはしょうがないのかもしれないが……

「ほら、さっさと行くわよ、シカマル、チョウジ」

この仕切り屋の性格だけは止めて欲しいと、常々シカマルは思っていた。

(いのの後ろにオレらがくっついて歩くと……モロ、あれじゃん)

姉御と手下二人……主人公に、けちよんけちよんに負かされる悪の三バカトリオ……

お色気抜群(その点はいのは当てはまらないのだが)の高ビーなド派手女と、手下その一(頭脳派。たいてい痩せののっば)と、手下その二(肉体派。たいていデブの大男)。

昔っからアニメやマンガによくあるパターンだが、そのありがたい格好悪いヤラレ役に似ているような気がしてたまらないのだ。

「っせーな、命令すんなよ、いの」

「なあに言ってるのー！ 私がせかさなきゃ、あんた達、いつまでもドラダラしてるくせに！ 急ぐわよ！」

「だから、命令すんなっての、バーカ」

「っさいわねエ。文句はまともに動けるようになってから、言っ  
よね」

「……………」

「なによ、その不満そうな顔。言いたい事あるんなら、はっきり言  
いなさいよ」

シカマルはあさつての方角を見つめた。

説明するのも……………何か面倒くさかった。

「別に……………何もねエよ」

「じゃ、さっさと動く！ 行くわよ！」

当分、このくされ縁は続きそうだ。

シカマルは天を仰ぎ、溜息をついた。

今日も、いい天気だった……………

(後書き)

シカマルのゴネてる内容は同ネタ多数だろうと思いつつ……アスマとシカマルが書いて楽しかったです。

今じゃ三人の中心がいのじゃないから、悪の三バカトリオじゃないのですね、ちょっと寂しいような。

そのうち、ヒナタ中心八班の話を書きます。それでは、又、何かで

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0522ba/>

---

くされ縁

2012年1月1日01時47分発行